龍安寺りやうあんじの林泉は封境に名池あり、鏡容池きやうようちと号す、冬日鴛鴦ふゆのうづら多く聚りて洛北の眺望世に名高し。池中に三つの島あり、

中の島を伏虎といふ、又水分石といふあり、霖雨の時此石上へ水越ぬれば西の方の樋を上て水を落すなり、三笑橋さんせうけうといふは東の方にあり。当山に八景やつのかいあり、是みな方丈よりの遠景を以て風色とす。「東山仏閣、八幡源廟、伏見城跡、淀川長流、東寺宝塔、花園暮鐘、雪山■松、隣院紅葉」所謂方丈の庭は相阿弥さうあみの作にして、洛北名庭の第一とす。庭中に樹木一株ちゆうもなく、海面の躰相にして、中に奇巖十種ありて島嶼たうしよに准へ、真の風流にして他に比類なし、これを世に虎の子渡しといふ。抑此地は文明年中細川右京大夫勝元の別荘なり。此人書院あながらに坐にして遙に八幡神廟を毎事拜せんが為に、庭中には樹木を植させずとなん。初めは此地後徳大寺ごとくだいじ左大臣実能公さねよしこうの別業なり、同じく公有公きんありの代細川勝元に譲れしなり。

著聞集云 文治の頃、後徳大寺ごとくだいじの左大臣におはしける時、徳大寺の亭させんに作泉をかまへられて、中御門なかのみかど左府さふへ案内申

されければ、わたり給ひにけり。其時三条の左府入道は右大臣、中山相国入道なかもましやうこくは別当にておはしける、おのく扈從あゐりし給ひけり。亭主手輿あゐりを用意して、ひとへ狩衣きたる侍六人にかゝせて、左府の車のもとへむかへに参らせられたりけるを、しきりにのがれ申されけれども、あながちに申されければ、のりて泉えわたり給ひたり。(中略) 其次の日、北院の御室威法寺法印もて、寺中にさふらひながら此事をしらず遺恨の事也と申されければ、御返事にかたのごとくに泉をかまへて候に、左府をしいれ候、入御候はゞめんぼくのよし申されたりければ、やがて渡御あり

けり。

塔頭西源院を今仮方丈とす。〔近年方丈祝融に罹ればこゝに移す〕釈迦、迦葉、阿難の三尊を安じ、開山日峰和尚の像を安ず。襖の画は中の間惣金極彩色の仙人尽、東の間竹林に虎、西の間琴碁書画、杉戸（表）象（裏）亀俱に狩野永徳の筆なり。此院の林泉又風流にして、上段の地に茶室あり、額蔵六と書す、正法山桂南の筆なり。当寺の後山絹笠山めぐりて雪の日の壯觀なり。

塔頭東皐院の林泉は遠景を興とす、坐にして八幡山崎淀川のながれ、小倉の江伏水鳥羽羽束師など鮮かに見えて、風光微妙なり。

同大珠院の林泉は、鏡容池西の方に巡りて庭中の美となる、池中の島へ石橋をわたして、島の中に綾杉といふ名木あり、株の皮目に杳ありて綾絹に似たり、葉は常の杉に等し、高さ三丈許、京師の珍木なり。其木下に墳墓あり、中に真田左衛門尉幸村の墓あり、五輪の石塔婆を建て法号を鐫ず。

幸村法号 大光院殿日道光白大居士 〔又当院の牌に慶長二十年

幸村の室 竹林院梅溪永春清大姉 乙卯五月七日歿〕

〔幸村の女の牌に真巖院法樂宗蓮大姉、此人は石河備前守の室家にして、真田氏の家系に添て什宝を寄附す、今当院にあり〕

○普賢像 兆殿司の筆   ○布袋画 宗達筆   ○唐画の鹿 筆者不詳

○色紙屏風 壺   雙   ○鷹画金屏風 壺   雙   ○南京鉢 洲浜形

〔龍猿の絵あり、其外手道具類数品あり、こゝに略す。寺説云、当院は石河備前守殿の菩提所にして、太平の後親属の

因ちなみをもつてこゝに建らるゝとぞ聞えし〕